

中野皖司生誕100年記念

透徹の眼

— 須田国太郎から村上華岳へ —



須田国太郎《ヴァイオリン》1933年

前期 2025年9月14日(日) - 10月13日(月)(祝)

後期 2025年10月22日(水) - 11月16日(日)

休館日＝月曜日(月曜日祝日の場合は開館し翌日休館) 開館時間＝午前10時～午後4時(入館は午後3時45分まで)
入館料＝一般：600円、シニア(65歳以上)・大高生：500円、中小生：250円

中野美術館

〒631-0033 奈良市あやめ池南9丁目946の2
TEL 0742-48-1167 <https://www.nakano-museum.jp>

中野美術館の創設者で初代館長の中野皖司（1925～2001）は、戦後すぐに同志社大学で美学を専攻して園頼三氏に学びます。

園氏は、心理学的美学から存在論的美学に進んだ詩人的要素の強い美学者で、後に皖司の絵の見方に影響を与えたものと思われます。

皖司は大学卒業後、家業の林業に従事しますが、

30代になって洋画収集の第1号となる林武の《金精山》（1956年）を購入し、それから須田国太郎の《大山田神社附近》（1956年）に巡り合います。

「画面の底からにじみ出てくるような、何か深いものが心をとらえた」という須田の絵から受けた深い感動が、

その後のコレクションの方向性を決めることになります。

中野皖司生誕100年記念

透徹の眼

— 須田国太郎から村上華岳へ —

そして、洋画の収集を始めて10年程たった頃、村上華岳の作品に出会い日本画に開眼します。

日本画では村上華岳と入江波光の作品が大半で、

波光の抒情的な作品《朝に遊ぶ子》（1927年頃）も同時期に購入されています。

華岳作品の収集は、《列仙伝》（1915年）、仏画を経て山水画に至り、

晩年の作《岳峰秋晩》（1936年）は、皖司が最も愛好了作品のひとつです。

このたび、当館では、中野皖司の生誕100年を記念して

「透徹の眼 — 須田国太郎から村上華岳へ —」を開催いたします。

本展は所蔵品の中から50余点を精選し、

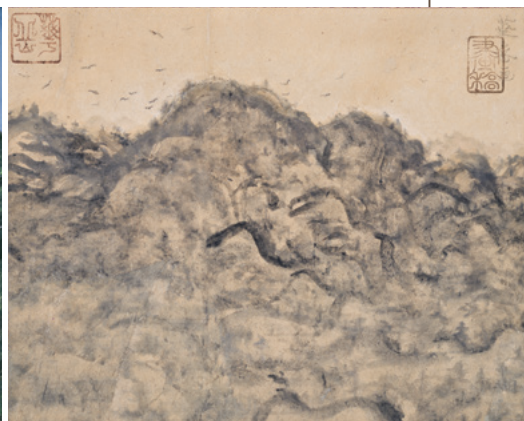
中野皖司のまなざしを通して近代画家たちの美の世界を探ります。



須田国太郎《大山田神社附近》1956年



林武《金精山》1956年



村上華岳《岳峰秋晩》1936年

アクセス

近鉄奈良線学園前駅下車、南出口から徒歩8分

- 大阪方面から 約30分
近鉄奈良線：
難波駅から学園前駅下車
- 京都方面から 約50分
近鉄京都線：
京都駅から大和西大寺駅のりかえ、
近鉄奈良線：
大和西大寺駅から学園前駅下車

公益財団法人 中野美術館



Side Story

表紙 須田国太郎《ヴァイオリン》1933年

《ヴァイオリン》は、初個展の翌年に描かれた

須田には珍しいモチーフの作品です。

皖司は若い頃ヴァイオリンを嗜んでいて、この絵には思い入れがあったようです。

須田の絵に触発されて、

皖司自身もヴァイオリンをモチーフに油絵を描きました。

